「機械翻訳とスペイン語教育（5）: 授業への機械翻訳の積極的な導入」
第 167 回関西スペイン語教授法ワークショップ（TADESKA）例会
日時：2023 年 12 月 10 日（日） 11:30 - 12:30
場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1401 教室
担当：長縄祐弥

Traducción automática y ELE (5): introducción activa de la traducción automática en el aula
CLIVII Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)
Fecha y hora: Domingo, 10 de diciembre de 2023, de 11:30 a 12:30
Lugar: Universidad Kwansei Gakuin, Campus de Umeda, Aula 1401
Ponente: Yuya NAGANAWA

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本発表は、山田(監) (2023)の内容をもとに、英語教育の現状や機械翻訳の導入事例を参考に、機械翻訳をスペイン語教育にどのように応用すればよいのか考察をおこなったものである. 加えて、機械翻訳や ChatGPT をはじめとする生成 AI を積極的に取り入れて、授業を展開するためにはどうしたらよいのか提案をおこなった.

本発表に先立ち、発表者が所属する大学の外国語学部スペイン語学科の 1 年生を対象に機械翻訳に対する意識調査をおこない、その結果をまとめたものが以下である.

a. 辞書と機械翻訳のどちらを使うか

（両方派）
時短のために機械翻訳を使うが、時間があれば辞書を引く.
機械翻訳ではわからない場合は辞書、辞書でわからない場合は機械翻訳.
見た目が難しそう、長い場合は機械翻訳.

（辞書派）
機械翻訳だけだとひとつの意味しかわからない.

（機械翻訳派）
授業に問題を解く場合だと、時間が足りなくなるので、機械翻訳を使う.
辞書を使うと遅く、不便.
単語だけなら機械翻訳で十分.

b. 辞書や機械翻訳の使い方を知りたいと思うか
いずれも 6 割近くが不要.

c. 機械翻訳を使うことに関しての罪悪感
「使ってはいけない」という認識は少なくともない.

d. 普段から機械翻訳について思っていること
とにかく早いので便利.
機械翻訳が不正確だという認識がある.
主語を明示してくれないので困る.
正しい検索方法や信頼できるサイトを提示してほしい.
課題は機械翻訳でいいと思ってしまうが、実際に現地に行った場合はそれが通用しないかもしれない.
その場しのぎにはいいが、定着はしないだろうと思っている.
機械翻訳で調べた意味は定着しにくい.

大半の学生たちは機械翻訳を積極的に用いつつも、機械翻訳で満足のいく結果が得られなかった場合には辞書を用いているようであった. ただし、授業中における問題演習など、時間が限られる場合には辞書よりも機械翻訳を用いることが多いようである.

このような結果をふまえて、学生たちに機械翻訳や生成 AI の利用を制限することはもはや不可能な状況であることを考慮すると、機械翻訳を利用できるケースと利用できないケースを教員がきちんと提示する必要があると考えられる. そのためには、教員自身が機械翻訳や生成 AI を利用し、これらを効率的に活用するためにはどうすればよいのか考えなければならないであろう.

それでは、機械翻訳をどのように語学学習へ応用していけばよいのであろうか. これまで教育現場では、とりわけ発表者自身は機械翻訳から得られた結果のエラーを見つけて修正することで学びを促す、Bad Model として機械翻訳を利用してきた. ただし、ここ数年で翻訳の精度は飛躍的にあがり、もちろんエラーは認められるものの、かなり正確なものが提示されるようになってきたと思われる. このことについて、例えば井口(2022)は「機械翻訳は天気予報のようなもの」とし、外れることもあるが、それを理解したうえである程度信頼して使えば、仕事の効率は飛躍的に上がると述べている. そのため、今後は機械翻訳の結果を Good Model、すなわち翻訳結果を手本と見立てて、そこから学習するものとして応用方法を模索していく必要があると考えられる.

この Good Model として機械翻訳を利用している例として、幸重(2022)がある. これは新聞記事を読み、自分自身の意見を述べる際に機械翻訳を使用して作成し、それを発表することをモデルとした英語教材である. このように、教材が主体となって積極的に機械翻訳を利用させるようなモデルは今後広がっていくものと思われる.

加えて、機械翻訳や生成 AI をうまく扱うためには、使用者自身が望む結果が得られるような言

葉やプロンプトを入力しなければならない．そのためには、メタ言語能力を高める必要があり、母語でわかりやすく伝えるためにはどうしたらよいのかを考えるきっかけになり得る．奇しくも、このことは母語を客観的に観察し、運用能力をさらに高めるという外国語を学ぶことの意義のひとつであると思われる．例えば、井上(2022)のような機械翻訳の精度を高めるために日本語をどのように書けばいいのかをまとめたものもある．ただし、人間ではなく AI に迎合するような、わかりやすくやさしい表現ばかり身につけてばかりいては、やはり母語の運用能力は伸び悩んでしまう．そのため、自身の母語で表現されたものと翻訳用にアレンジした言語というのは明確に区別する必要があるであろう．このことについては、柿原(2023: 6-7)も以下のような指摘をしており、AI を基準にして言語が運用されることを危惧している．

> それは、機械翻訳に正確に訳してもらえるようなことばを書くべきだという発想である。このような態度は、AI 崇拝の規範主義につながりかねない。これでは学習者は機械翻訳のみが正しいと考え、授業の内容や教員の存在を軽視してしまうことになりかねない。そもそも言語は人間の物である。その点を忘れてはいけない。

当然ながら、機械翻訳や生成 AI が言語学習や言語教育におけるすべてのことをカバーしてくれるわけではなく、これらに依存すべきであるということではない．例えば、地域差、共起しやすい語、法選択、例文、熟語、多義性などは、ChatGPT などで出力が可能であるものの、圧倒的に辞書に記述されている情報のほうがはるかに豊かである．そのため、辞書の使い方の指導も必要であろう．辞書に記載されている情報が単語の意味だけではないことを示すことで、機械翻訳が辞書の代わりにならないことをはっきりさせておく必要がある．

以上を踏まえて、機械翻訳を用いた授業をどのように展開させていけばよいのであろうか．ひとつの提案は ChatGPT で自身の興味のあるシチュエーションでの対話（あるいはメールなどのまとまった文章）を出力させ、それをペアワークなどで用いるというものである．自分たちで作り出したものから重要表現を抜き出したり、まるごと覚えさせたりすることで、いわゆる「使える」スペイン語を体得させる．もうひとつはあるテーマに対し、ChatGPT で自由作文をさせ、それを発表させるものである．この場合はどちらかといえば、発音や表現方法を重視することになるだろう．いずれにしても、これらについては、未習の文法事項を扱うことになるため、その点は考慮する必要があるであろう．

参考文献

井口景子 (2020)「AI 翻訳で英語学習法はこう変わる」『ニューズウィーク日本版』35-9: 18-30

井上多惠子 (2022)『グローバル×AI 翻訳時代の新・日本語練習帳』中央経済社.

小田登志子 (2021)「機械翻訳が一般教養英語に与える影響に対応するには」『人文自然科学論集』149、3-27

柿原武史 (2023)「生成 AI 技術はスペイン語教育にいかなる影響をもたらしうるのか」『日本イ

スパニヤ学会「会報」』30: 5-7
南部匡彦 (2023)「学習者の機械翻訳利用の状況」山田優監修・小田登志子編『英語教育と機械翻訳』金星堂、81-92
山下美朋・山中司 (2023)「機械翻訳を教育に取り込む」山田優監修・小田登志子編『英語教育と機械翻訳』金星堂、168-192
山田優 (2023a)『ChatGPT 翻訳術』アルク
山田優 (2023b)「機械翻訳の仕組みと活用法」山田優監修・小田登志子編『英語教育と機械翻訳』金星堂、23-43
山田優監修・小田登志子編 (2023)『英語教育と機械翻訳』金星堂
幸重美津子他 (2022)『Let's Work with AI! AI 翻訳で英語コミュニケーション』三修社